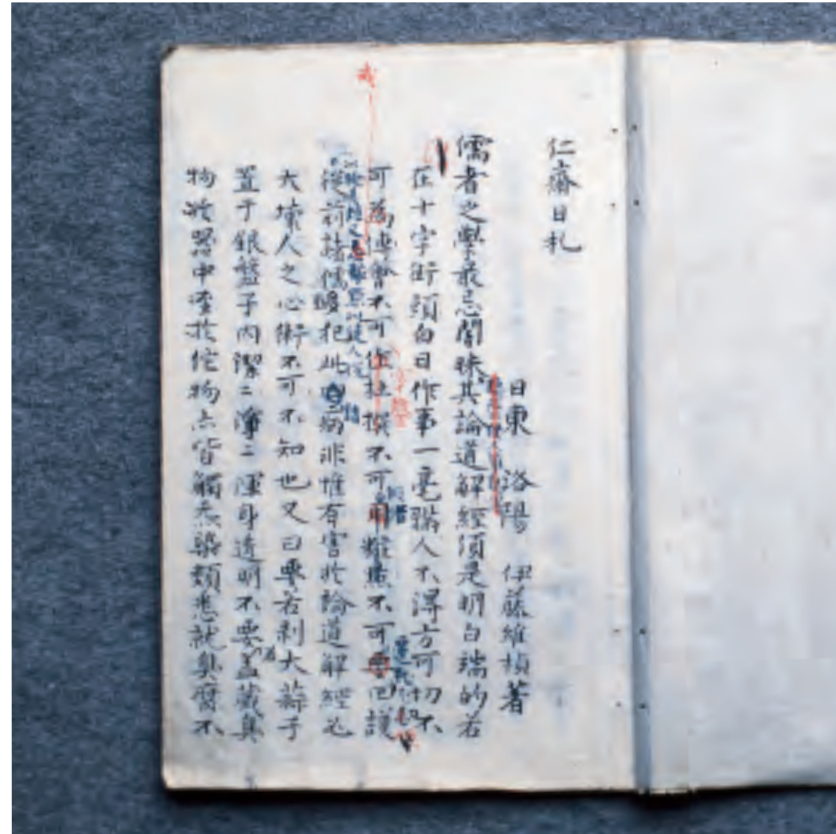




人文学部教授
遠山 敦

とおやまあつし
修士(文学)
専門分野は、倫理学、日本倫理思想史

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧いただけます。
<http://kyoin.mie-u.ac.jp/profile/1431.html>



伊藤仁斎の著書「仁斎日札」自筆稿本の冒頭部分



「仁斎日札」の表紙と曾孫伊藤弘斎(東峯)による自筆審定書等

これまでの日本人の生き方を探究し、 私たちの生き方を考えていく。

私たちの日々の生活は、長い年月を通じて形成されてきた
伝統文化に深く根ざしています。

人文学部では、倫理学・日本倫理思想史の分野から
そうした文化的伝統の上に築かれている、
人々の日々の精神の営みを探究しています。

倫理学・日本倫理思想史とは

倫理学・日本倫理思想史は、日本人が自らの生き方をどのように自覚してきたかを明らかにすることを通じて、普遍的な倫理の問題を考えようとするものです。倫理学というと、何か壮大で精緻な体系的思考を想像されるかもしれませんが。確かにその意味では、少なくとも近代以前の日本に「倫理学」はありませんでした。しかしそのことは、過去の日本人が自らの生き方に無自覚であったことを意味するものではありません。人々は、物語や歌といった文芸に、神仏の信仰に、あるいは習俗や儀礼のなかに、自らの生を自覚し表現してきました。日本倫理思想史は、そうしたさまざまな表現のなかに、人々が何を愛し、信じ、おそれ、願ってきたか、何を究極的な拠り所として生きてきたかを明らかにすることによって、今を生きる私たちの生き方を反省し、考えていこうとするものです。

煩悩としての愛

例として、「愛」という言葉を取り上げてみましょう。現代において愛は、極めて積極的な意味を持つものと考えられています。そして古くは『論語』の中でも、弟子に「仁とはなにか」と問われた孔子が、「人を愛することだ」と答えています。しかし、仏教が時代の基本思潮であった中世において、愛は必ずしも肯定的にのみとらえられていたわけではありませんでした。そもそも仏教では愛は「渴愛」ともいわれ、喉の渇きにも似た人間の最も根源的な欲望という意味を持っています。その意味で、愛は煩悩なのです。もちろん仏教においても「慈愛」や「恩愛」が重視され、親子・夫婦の情愛や人を慈しむ心は大切なものだと考えられていました。しかしまた「恩愛の絆」という言葉は、親子や夫婦の断ち切りがたい情愛が、悟りの妨げになることを示してもいます。「子故の闇」ともいわれるように、人々は愛を貴いものととらえつつ、その暗い一面をも自覚していたのです。

他人との間の越えがたい溝

一方、近世になり、儒教が指導的原理になると、人々の現実的な生活や人間関係がより重要なものだと考えられるようになっていきます。そうした近世の儒学者伊藤仁斎(1627-1705)は、先ほどの『論語』の言葉などに依拠しながら、儒教の最高の徳目である仁を愛だととらえます。しかし仁斎のいう愛は、個人的な感情ではなく、広く人間関係全体に実現されるべき理想だとされます。「(愛が)一人に及んで、十人に及ばないのは仁ではない」とする仁斎にとって、愛は実現困難な理想であり、実践的には人を「愛する」ことではなく、ひたすら人に対して「忠信」(誠実)であることが求められます。そして、そうした考えの根底にあるのは、人と人との間には越えがたい溝があり、それを乗り越えるべくひたすら「忠信」に生きるとき、人は結果的に愛に生きうるといふものであったと思われます。さて、そうした他人との間の越えがたい溝という問題は、儒教に対抗して現れた国学にも引き継がれていきます。松阪の国学者本居宣長(1730-1801)によれば「物のあはれ」とは、物事に触れて心がさまざまな感情に揺れ動くことを意味し、男女や親子の愛情は極めて積極的に評価されます。しかし一方、宣長においてそうした愛情は、人の心の内に深く秘められ、容易には他人に理解・共感されないものとも考えられていました。そしてそこに、人と人の共感を生み出す特殊な回路としての歌が、国学の主要なテーマとなっていく理由があるといえるのです。

虚偽としての愛

近代に至ると、愛はキリスト教との関係が強く意識されるようになりますが、しかしここでもまた、さまざまな問題が指摘されます。文学者の伊藤整(1905-69)は、近代の小説に現れた「愛」という言葉がいかにか上滑りのものであるかを、「近代日本における愛の虚偽」として指摘しました。伊藤によれば、キリスト教の律法としての愛は人間には不可能なものであり、そして、それ故に人は常に失敗を繰り返しつつも、懺悔と祈りによって愛を実現すべく努めなければならないとされます。しかし、そうしたキリスト教的愛への理解と、それにともなう反復的努力のないところで「愛」が語られるとき、そこには大きな虚偽が生まれるというのです。

以上、「愛」という言葉を巡る先人の思索の跡をごく簡単にたどってきました。日本倫理思想史は、このように、人々が自らの生の意味やあるべき姿をどのように捉えてきたかを探究することを通じて、今を生きる私たち自身の生き方を考えていこうとするものなのです。



本居宣長の肖像画